

---

# 赤と青の双眸を持つ一角獣

桜椿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤と青の双眸を持つ一角獣

### 【Nコード】

N0224BA

### 【作者名】

桜椿

### 【あらすじ】

国家解体戦争から数十年。人々は汚れた大地を捨て、空にその生活圏を広げた。

地上に残されたのは、国家解体戦争によって国家の代わりに生まれた企業と、アーマード・コア「ネクスト」を駆るリンクス達であった。

圧倒的な個々の戦闘力を誇るネクストを恐れ、企業は傭兵管理機構カレードを生み出す。そのカレードに、青い瞳を持つネクストが現れる……

赤と青の双眸（オッドアイ）の少年（前書き）

アーマード・コア フォーアンスターの二次創作です。

あまり知識が無いのに始めたので、原作との矛盾が出たら許してくださいm(´`)(´` )m

## 赤と青の双眸（オッドアイ）の少年

「はぁ……、はぁ……!!」

時間帯は夜中だろうか。暗闇の中、短い黒髪を揺らし、包帯で右目の視界を塞がれつつも、なんとか見えている青い瞳を頼りに、少年は縛れる両足を頑張って動かしていた。

「逃がすな!!」

「どこだ!? 被験体A - 27!!」

大人達の罵声が、疲労で倒れそうになる少年に活力を与える。あの罵声から逃れたい。早くここを立ち去りたい。その二つの思念だけが少年をある場所へと突き動かす。

「はぁ、はぁ……」

少年は足を止めた。目的の場所に辿り着いたからである。そして、目の前にある人の形をした物体を見上げる。

アーマード・コア「ネクスト」。それが、少年が探し求めているものである。

「これで……、自由になれる……」

少年は、慣れた様子でネクストに乗り込む。そして、一つ一つの電源を入れる。電源が入れられたことにより、ネクストは起動する。機動力重視に設計された細身の漆黒のフォーム。そのアイセンサー

の光は、少年の瞳とは正反対の深紅色であった。

「貴様！試作機に！」

「撃て！射殺許可は出てる！」

「ノーマル部隊を出動させる！！動きくらいは止められるハズだ！  
！」

ネクストに乗り込んだ少年に向けて、大人達はマシンガンを撃ち込む。だが、所詮は対人武器。ネクストの装甲の前では弾かれるのが目に見えている。

少年は、ゆつくりとネクストを外へ向かわせた。

\*

「ぐっ……」

少年は、外からの衝撃に思わずたじろいだ。なぜなら、少年が出た場所は、高度7000mの高さに浮遊しているプラットフォーム、クレイドルの甲板であるからだ。大気の流れが衝撃として少年とネクストを襲ったのだ。

「早く……、しないと……」

動くな！被験体A - 27！

突如聞こえた声に、少年は弾かれたようにコクピットのレーダーを確認する。気付くと、ネクストの周囲にはノーマルに囲まれていたからである。

変われよ……

少年は、自分の内側から聞こえる声に驚愕する。

(嫌だ！殺してまで助かりたくない……！)

なに甘ったれたこと言ってるんだ？見るよ。アイツらは、「俺たち」を殺しに来てるんだぜ？

(でも……)

安心しろ、すぐに終わらせてやるよ……

少年は、もう一人の「自分」に身体を託した。

\*

「動きが止まってる？」

「今だ、取り抑える……！」

ノーマルの一機が、漆黒のネクストに向かう。

その瞬間だった。

たったその一瞬で、ノーマルの胴体は両断されていたのだ。

誰もが驚愕した。いつのまに、誰が……

いや。相手はすぐに判断出来た。漆黒のネクストだ。立ち止まっていたネクストが、右腕のレーザーブレードを振り上げていたからだ。

「コイツ……！」

「待て！クレイドルに当たる……！」

戸惑いが命取りなのは、正にこの事。クレイドルを傷付けてはならないという思考に注意を反らしてしまい、漆黒のネクストに胴体を薙ぎ払われてしまった。

漆黒のネクストは、ノーマルが塞いでた場所に通路を作り出し、一気にそこに飛び込んだ。

「馬鹿め、もう逃げられないぞ!!」

ノーマルがマシンガンを構える。なぜなら、ネクストはクレイドルの翼に立っているからだ。もう逃げ場はない。幸い、相手は射撃武器を持っていない。こちらが優勢なのは目に見えている。

ククツ、ハハハ……!

そんな絶望的な状況であるはずなのに、笑い声が聞こえた。少年の声だ。

笑わせんなよ!それで勝ったつもりかよ!?ああ!?

まるで、人が変わったのかのように、少年の口調は荒々しくなっていた。否、

その「変わった」事が原因で、大人達は少年を殺さざるを得なくなっただ。

よく聞け、屑ども。俺は、ぜってえにテメエらを潰す!この、アレックス・レイヴアンダー様がなア!!

その一言を置いて、漆黒のネクストはクレイドルの翼から飛び降

りた。

「なっ!?!」

「放っておけ。助かりはしない。」

大人達は、多少後ろ髪を引かれる思いで撤退した。

一人の少年が、ネクストを強奪してクレイドルから脱走した。この事は、物語が始まる約14年も前の事である……

赤と青の双眸（オッドアイ）の少年（後書き）

いきなりクレイドルから始めました。

これからもオリジナルに走る事もあります……

カライド、入隊（前書き）

タイトル通りです

## カラード、入隊

荒野に、一体の「アーマード・コア「ネクスト」」が身を屈めていた。戦闘中ではないからか、そのコクピットは開いていた。漆黒のカラードリングに、ブルーのサブカラー。その要塞の様な姿は、重量二脚型の特徴である。

「……………」

コクピットの中には、セミロングの黒髪を持ち、前髪をバンダナで上げ、更には右目に眼帯をしていた。そして今、青年は身体をシートに預けて趣味の音楽鑑賞に浸っていた。

「ーン！アレーン！」

と、一人の少女が漆黒のネクストの脚部の関節部分から顔を出し、青年を呼ぶ。長い茶髪を高い位置に一つに結び、額に鉢巻きを結んでいる。そして、年頃の少女特有の大きく丸み帯びている緑色の瞳を持つ少女だ。

「ちよっとー！アレーン！」

「ンだよ、うるさいな……………」

少女は、青年がいるコクピットに身体を半分乗り込ます。そして、青年はめんどくさそうに返事をし、イヤホンを外した。

青年の名は、アレックス・レイヴァンダート。どこにも属していないフリーの傭兵である。尚、アレンの呼び名はあだ名である。そして、少女の名はレナ・アウインダー。アレンのネクスト、ブルーア

イズの専属整備士である。

二人は互いの役割を果たしながら生活をしてきたが、この御時世、とうとうその体制では危うくなってきたのである。

「早くオーメルに行こうよー！」

「ブルーアイズは？」

「バツチリよ」

アレンは、フリーの傭兵として活動していた時に、企業連合のオーメル・サイエンス・テクノロジーからスカウトを受けたのである。背に腹は変えられず、アレンはそのスカウトを了承した。そのオーメルに向かう途中、アレンの愛機である漆黒のネクスト。ブルーアイズが不調をきたして、レナに整備をしてもらっていたのだ。

「じゃあ、行くか。」

「うん」

レナがブルーアイズのコクピットから降りたのを確認した後、アレンはコクピットハッチを閉めた。アイセンサーのカメラから、レナが旧型の車に乗るのが確認出来る。

そして、車の速度に合わせてオーメル社に向かった。

\*

「ここが……」

「オーメル……」

二人は驚愕していた。どうにか、オーメル敷地内に入った二人は、オーメルの輸送車と合流し、輸送車に運んでもらってオーメル本部に着いたのである。

「さっすがー 設備充実してるー」

最新設備の集まりに、レナは目を輝かせた。まるで、探し求めていた宝の山を見つけたような表情だ。

「変な御嬢さんですね。」

「コイツ、そう言うのに目が無くて……」

ちょうど、輸送車の運転席で運転している眼鏡の男性が呟く。尚、隣の助手席にはアレンが、後ろの一行にレナが乗っている。恐らく、後ろの一行は客人用。あるいは、リンクスが重症を負った際の緊急簡易ベッドなのだろう。とりあえず、運転席、助手席の後ろに一人が寝転がって少し足を曲げるくらいの長さのシートがあった。

そのシートの上で、レナが左右の窓に向かって右往左往しているのだ。

「すみません、うるさくて……」

「いえ。むしろ良いですよ。あれぐらいバカな娘は調……、躰のしがいがある。」

明らかに調教と言おうとした男性に、アレンはあえてツッコミをしなかった。理由は簡単。面倒だからである。

「えーっと、名前は……」

「アレックス・レイヴァンダーだ。連れは、レナ・アウインダー。」

「アレックス様ですか。私は、エクリプス・シルヴァーナ。以後お見知り置きを。」

眼鏡の男性、エクリプスの淡々とした質問に、アレンは答えた。

「貴方のネクストは、このハンガーに置いておきますので、登録を  
してきてください。」

「りょーかい。レナ、行くぞ。」

エクリプスが輸送車を止めて、アレンを降ろす。未だに興奮の最  
中にいるレナは、アレンが引きずっていくことにした。

\*

登録はえらく早く終わった。ただ単にアレンが話を聞き流してい  
ただけかもしれないが。

企業に登録し、カロードへ配属となる。企業に登録しても、アレ  
ンはまだ入り立て。そのため、他の企業からの依頼も受けられる仕  
組みとなっている。重なる業績によっては、他の企業に飛ばされた  
り、正式に登録した企業のリンクスとなるか。正に、自分の結果次  
第となっている。元々、アレンは企業云々のしがらみは気にしてい  
ないようだが……

「アレン！カロードに行こ！オペレーターの人がいるんだって！  
」！

レナは、ぼーっとしていたアレンの手を引っ張る。アレンは、引  
っ張られるがままにレナに着いていった。

\*

そして、カロード本部。傭兵達の大事な仕事場だ。待ち合わせ用  
のカフェや、娯楽施設、ショッピング等も充実している。傭兵、依

頼人、オペレーターとの信頼関係を築くためなのだろう。

その中で、最もシンプルな待ち合い室にアレンとレナはいた。待ち合い室は殺風景で、置いてあるのも長椅子とテレビだけだ。テレビはおそらく、依頼の説明等に使われるものだ。

「来ないね……」

「だな……」

二人が退屈そうに呟いた時だった。

「お前たちがアレックス・レイヴァンダートと、レナ・アウィンダ  
ーか……」

一人の女性が待ち合い室に入ってきた。長い黒髪を一つに結び、乱れなくスーツを着た女性だ。年齢は、アレンと同じか下くらいだろう。ちなみに、アレンは26歳。レナは18歳である。

「アンタは？」

「アレックス。お前のオペレーターとして就任した、セレン・ヘイズだ。」

アレンの問いに、女性。セレンはきつちりと答えた。

「うわっ。アレンと正反対だ……」

「お前もだろ。」

驚きの声を上げるレナに、アレンはツッコミをした。

「何よそれえ！」

「事実だろ。」

アレンとレナは互いにくだらな口喧嘩を始めた。  
その様子を見て、セレンは思わず溜め息をついた。新たに配属さ  
れたアレックスというリンクス……

本当に、大丈夫なのだろうか……

## カライド、入隊（後書き）

アーマード・コマという世界観に合っていないのは自覚しています…

…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0224ba/>

---

赤と青の双眸を持つ一角獣

2012年1月2日06時47分発行